

## 2章：歴史に関する知識と同じく信念も教えることができるか？

Is It Possible to Teach Beliefs, as Well as Knowledge about History?

James V.Wertsch

担当：星瑞希（東京大学大学院）

## ▼著者情報

○ James V.Wertsch



ワシントン大学教育学部教授、社会思想分析プログラムの教授（2000年時点。現在は退職したと思われる）。出版物に *Vygotsky and the Social Formation of Mind* (Harvard University Press, 1991)、*Mind as Action* (Oxford University Press, 1998)；邦訳 佐藤公治ほか訳『行為としての心』、北大路書房、2002)がある。彼の研究は、アイデンティティ形成におけるテキスト的意味の役割に特段焦点を当てながら、言語、思想、文化に着目している。

## ▼重要な用語

mediated action 媒介された行為      affordances and constraints アフォーダンスと制約  
 internalization 内面化      mastery and appropriation 習得と専有      resistance 抵抗  
 methodological individualism 方法論的個人主義

## ▼議題

・日本の子どもたちはいかなる歴史ナラティブを「専有」するのか？近現代の歴史ナラティブは「学校の歴史」ではなく「ネット上の言説」を「専有」している生徒も少なくないように思えるが、こうした状況に歴史教育はいかに対峙できるか？

## ▼概要

## エストニア民族の調査

- ・1991年、ソ連の分裂の最終段階
- ・1940年の出来事に関する2つの説明

	フォーマル	インフォーマル
特徴	・学校やメディア、その他ソビエト政府に	・家族や友達、アングラ文学やその他の非

	統制されている機関で示された公式見解 ・ソビエト政府によって産み出されたものであり、いつでも一枚岩のような首尾一貫した物語の形式を取る	公式な情報源から学んだ非公式な見解 ・様々な源から生じたものであり、様々な形式を取っており、公共の場で語ることは厳しく禁止されていた。
人々の反応（認知面）	人々は、起こった出来事やその登場人物や動機について推論する時に、フォーマルな物語をいともたやすく利用することができた。	彼らの知識は部分的で断片的な傾向があり、過去についての首尾一貫した解釈や論理的思考の筋道を体系化できないことも多かった
人々の信念	「知ってはいるが信じていない」	「信じてはいるが知らない」

・歴史物語を知ってはいるが信じてはいないパターンを見つけるために旧ソ連まで行く必要はない  
e.g.) Holt は、アメリカのマイノリティの学生が、歴史は「誰か他人の事実」によって作られているという立場を取ることを観察している  
→何が知識と信念を構成するのかという問題や、そのような知識と信念はどのように関係しているのかという問題を提起する。

・Wertsch は「媒介された行為」という形式に焦点を当てる社会文化的分析の観点から扱う  
→この観点からすると、話すこと、考えること、思い出すことを含む人間の行動には、活動主体と活動を行う際に使用する「文化的ツール」との間の減じることのできない緊張が、本質的に関係しているといえる。

### 「習得」と「専有」

○行動主体が過去を表現するのに用いられる物語との間の関係を分析するに当たり、「内面化 (internalization)」という言葉によく遭遇するが、Wertsch は2つの理由からこの言葉を用いるのを避ける

①内面化という空間的メタファーを使うことによって我々は皆、概念や価値などを見つけるために、個人の内側、心の内側、意識の内側、あるいはどこか他の場所を探索したい欲求にかられてしまう。

②少なくとも人々が物語を知ることが信じることになるのかという議論をする上で、この言葉が差別化する必要のある比較的異なった2つの概念を混ぜこぜにしてしまうからである。

→「習得 (mastery)」と「専有 (appropriation)」という概念を用いる

「習得」	・その使い方を知ることに関係する。例えば、歴史的物語を習得することは、それらを再構成する能力や、出来事の原因やある集団の行動の背景にある動機を推論するためにそれらを利用する能力の中には反映されている ・文化的ツールを習得することが主に認知機能の表題の下に分類されることになり、「アイデンティティ・リソース」としての物語に感情的にコミットすることとは比較的ほとんど関係
------	--

	がない
「専有」	<p>・テキストを自分自身のものとするというこの意味は、<u>認知的習得とは完全に独立して働くと考えられる感情的次元と関連している</u></p> <p>・この意味における専有の対義語は「抵抗 (resistance)」であり、<u>これはテキストと自分の距離を取ることに関連しており、ある人が文化的ツールに触れているからという理由だけで、そしてその人がそれを習得しているからという理由だけで、その個人がそれを彼または彼女自身のものにしていることを意味するわけではない。</u></p>

・習得と専有の問題は、媒介された行動と関連する分析的フレームワークの一部である。しかし、それについて言わなければならないことの大半は、他の理論的展望からなされる観察と関連したものである。

### 専有の心理学的側面

○歴史的テキストの専有に関する一部の有用な洞察は、「自己決定論」の研究から収集することができる。

・私の目的に対する自己決定論の最も重要な意味の1つは、それが内在化についての微妙な説明、つまり私が専有と呼ぶものの説明を提供していることである。

内在化は・・・個人が外部の情報源から信念、態度、または行動規則を獲得し、それらの外部規則を個人の属性、価値観、調整スタイルに徐々に変えるプロセスに関係している・・・この定義では次を明確にしている。完全な、または最適な内在化は、価値観または規則を取り込むだけでなく、自分自身の感覚と一体化させることであり、つまり、それを自分のものにするものである。その結果生じる行動は完全に選択されるか、または自制される。

→この視座に立てば、異なるタイプと程度の内在化が存在することになる。グロルニックらは、「内在化は・・・全か無かの現象ではない。むしろ、外部の情報源によって最初に調整された活動が自分自身のものとして認識され、自己決定的として経験される程度に関係している」と強調する。

・また、内在化のレベルは「その人によって取り入れられた価値観あるいは規則が、完全に統合されてきたかどうか、そして内在的に（外在的というよりも）認知された因果律を持ち合わせているかどうかと関係する。」

→歴史に 関するフォーマルな説明を「知っているが信じていない」といった筆者自身の言葉は、訂正する必要がある。

○自己決定論から得られる重要な洞察を認識しつつ、一方で「**方法論的個人主義**」の落とし穴を回避しなければいけない

→個々の心理的現象へ、または属性へと専有を還元してしまおうとする誘惑を避けなければいけない  
e.g.) ナショナリズムと国家的アイデンティティにおいて役割を果たす「本質主義」

## 専有の社会文化的側面

・方法論的個人主義の陥穽を回避する最も明らかな方法の一つは、専有がもつ文脈的多様性を考慮に入れることである。これは信念体系を、個々人の静的属性としてではなく、動的で文脈特有の属性として見ることを意味する。

・しかし、心理学的意味におけるテキストの専有などは存在しないとか、個人は全体として影響されやすく、たまたま居合わせた文脈に依存するものであるなどと主張することにはならない。

### エストニアの「文脈」

・歴史の説明は、教育、メディア、その他の情報源が中央政府から厳しく統制されたばかりではなく、代替的解釈を公に議論すれば過酷な制裁の対象となった。

→少なくともある一定の集団の中では、こうしたシステムのために歴史はきわめて論争的な事柄となり、公式解釈に明確に対抗する非公式解釈が生まれることになった。

・1970年代および80年代のエストニアでは、ロシアやソ連支配下の他の地域と同じく、フォーマルな歴史に対するシニシズムが広がり、インフォーマルな歴史が地下出版やジョーク、演劇、その他の手段を通じてますます活発かつ大っぴらに生産されるようになった。

・互いに競合する解釈はフォーマルな歴史とインフォーマルな歴史として明確に対立しており、その特徴は、フォーマルな歴史に対する強烈的な抵抗、および、インフォーマルな歴史の専有にあった。

・筆者自身の強い直観では、首尾一貫した単一の歴史的ナラティブの厳格な強制が反対勢力に好都合の「標的」を提供することになり、代替的歴史解釈が生まれたのではないかと考えられる。

・このような社会文化的状況は、同時期における西側世界の歴史学習および議論の文脈とは対照的

### Seixas や、Itarion と Levstik による北米の学生についての研究調査の結果

・学生たちは、複数の歴史解釈を最低でも部分的に習得しているようだったが、そうした複数の解釈は、一見したところ、専有または抵抗すべき明確で対立的なナラティブのカテゴリーに分類されておらず

## 結び

○「習得」と「専有」のプロセスは、純粹に心理学的あるいは社会文化的な観点からでは十分に理解できない

→社会文化的文脈と個人的心理のレベルにおいて相互補完的に連結した様々なシステムを含んだ状況を見ているのであり、どちらか一方を他方に吸収してしまう誘惑には抗しなければならない。

○歴史教育とその結果についての議論には習得と合わせて専有の概念を導入する必要があるということである。